

韓国語の「저」「나」に対応する日本語の 自称代名詞の使用に関して

－ 韓日対訳資料の分析を中心に －

郭 銀 心*

(e-mail: kwak5017@naver.com)

目 次

1. はじめに
 2. 分析資料
 3. 韓国語と日本語の自称代名詞の体系
 4. 自称代名詞の使用様態
 - 4.1 自称代名詞の種類と出現数
 - 4.2 女性話者の自称代名詞の使用
 - 4.3 男性話者の自称代名詞の使用
 5. 終わりに
-

1. はじめに

日本語の人称体系は、自分を指し示す「自称」、聞き手を指し示す「対称」、そして第三者を指し示す「他称」の3つに分けることができる。鈴木(1973)は、話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念として「自称詞」、話しの手相手に言及することばの総称を「対称詞」、対話の中に登場する第三者を表すことばを「他称詞」と呼んでいる。この枠組みは、人称代名詞だけでなく、親族名称、地位名称などを一括したものであり、これらの総称を「人称詞」としている。

*중앙대학교 아시아문화학부, 시간강사, 사회언어학

日本語と同じく敬語体系が発達している韓国語には、人称詞の位置づけや使用における類似点が多く存在し、韓国語と日本語の人称詞に関する対照研究は数多く行われてきた。しかしながら、先行研究では、人称詞の使用の共通点や、韓国語には見られない日本語の性差が相違点として強調されるだけであって、実際の運用における詳細な比較はあまり行われてこなかった。また、人称詞の中でも対称詞やその下位範疇の一つである親族呼称に関する研究が多く、それに比べて自称詞に焦点を当てた研究は少ない。自称詞に関する対照研究には、アンケート調査を通して自称詞の使用を比較した가혜경(1998)と林炫情他(2002)、日韓翻訳テキストに見られる自称詞の種類と出現数を比較した許貞淑(2007)、日韓・韓日翻訳テキストの比較を通して、人称詞の出現数にずれが生じる要因について分析した鄭惠先(2001)などがある。しかし、いずれも対称詞と合わせた研究の一部にとどまっている。本稿では、自称詞の下位範疇にある自称代名詞を主な考察の対象とし、韓日翻訳テキストを比較することで、韓国語の自称代名詞「나」と「저」に対応する日本語の自称代名詞が翻訳テキストの中でどのように使用されているのかについて分析する。2)

2. 分析資料

本稿では、韓国語小説を日本語に翻訳した作品4種を対象に分析を行う。以下は、韓国語の原作テキスト(ST)と、それを日本語に翻訳した対訳テキスト(TT)である。

- ①ST 『엄마를 부탁해』(신경숙, 2008) 창비
TT 『母をお願い』(安宇植訳, 2011) 集英社
- ②ST 『우리들의 행복한 시간』(공지영, 2005) 오픈하우스
TT 『私たちの幸せな時間』(蓮池薫訳, 2007) 新潮社
- ③ST 『오래된 정원(상, 하)』(황석영, 2000) 창작과 비평사
TT 『懐かしの庭(上、下)』(青柳優子訳, 2002) 岩波書店
- ④ST 『포도밭 그 사나이』(김량, 2005) 청람
TT 『ぶどう畑のあの男』(金智子, 2007) 講談社

これらのテキストを対象とした理由は、現代を舞台にした作品であり、ST、TTともに2000年以降に出版されているため、近年の言葉遣いを反映していると考えられるからである。また、テキストには家族内の会話と家族外(友人、先輩と後輩、恋人など)の対話が多様に見られるため、分析対象に適していると判断した。

そして、翻訳家の性別は男性が2名(①、②)、女性が2名(③、④)であり、4名は日本

人または在日2-3世の日本語ネイティブである。筆者は、テキストを選ぶ際に、翻訳家の第一言語が日本語であることを条件にした。本稿では韓日翻訳作品を分析資料として扱っているため、翻訳家には韓国語と韓国文化に対する高い理解能力と同時に、日本語ネイティブならではの繊細で正確な表現を求めたからである。

3. 韓国語と日本語の自称代名詞の体系

ここでは、従来の研究をもとにして、韓日両言語の自称代名詞の体系について概観する。

韓国語の自称代名詞には、「나」と「저」が主に使われる¹⁾。「나」は聞き手の地位が話者と同等か話者より低いと思われる場合に用いられ、「저」は聞き手の地位が高く「합全体」で待遇しなければならない状況では、話者自身を低める言葉として使われる。一方、日本語では「わたし」と「わたくし」が男女共に最も標準的に用いられ、「わたくし」は「わたし」よりフォーマルであり、多く目上の人に対して用いられる。日本語の特徴としてその他の自称代名詞には性差が表れる。女性専用には「あたし」もしくは「あたくし」が、男性専用には「ぼく」「おれ」「わし」が使われる²⁾。しかし、いずれも「わたし」よりはくだけた場面でしか用いられない。

表1. 日本語の自称代名詞の体系³⁾

自称代名詞	性別	性質
わたくし	男女共用	「わたし」よりあらたまった場面で用いられる 標準的に使われる
わたし		
あたし	女性	「わたし」よりもくだけた場面でしか用いられない
ぼく	男性	
おれ		
わし		

両言語間の自称代名詞を比較すると、韓国語は、話者と聞き手の上下関係によって選択され、日本語は、性別や場面のあらたまり度によって使用が制限される。対応する語を比べると、「저」には「わたくし」と「わたし」が、「나」には「わたくし」を除いた全てが対応する。逆に見れば、男女共に最も標準的に用いられる「わたし」だけが「저」と

1) 남기심, 곽영근(1993)によれば、韓国語の自称代名詞はこの他にも漢語系統の「짐」「과인」「본인」「소생」などがあるが、現代の韓国語では消滅またはほとんど衰退しているため、本稿では「나」と「저」を中心に分析を行う。
 2) 日本語の自称代名詞はこの他にも、主に女性や子供が用いる関西方言の「うち」や、上下関係が厳しい警察や自衛隊などの職場で用いられる「じぶん」、主として男性が用いる「おいら」などがある(金丸, 1997; 日本語記述文法研究会(編), 2009; 『大辞林』第三版)。
 3) 表1は、金丸(1997)と日本語記述文法研究会(編)(2009)をもとに作成した。

「나」の両方に対応できるが、その他の自称代名詞は対応が難しくなる。つまり、目上に対して用いる「저」に対して、男性専用の「ぼく」「おれ」「わし」は使用できないのである。このように、従来の研究にもとづいた自称代名詞の使用には、かなりの制約があるようだが、実際の使用においてはどうかであろうか。

以下では、日本語の自称代名詞に表れる性差を考慮し、女性話者と男性話者に分けて分析を行い、「저」と「나」に対応する自称代名詞が、TTではどのように使用されているか考察する。

4. 自称代名詞の使用様態

4.1 自称代名詞の種類と出現数

分析資料に見られる自称代名詞の種類とその出現数は、以下のようである。

まず、STでは、単数の自称代名詞には「나」と「저」が現われ、その複数形である「우리, 우리들, 우리네」と「저희, 저희들」が見られる。

表2. STに現われる韓国語の自称代名詞

自称代名詞 作品	単数形		複数形	
	나	저	우리(들, 네)	저희(들)
①엄마	154	10	21	0
②우리	370	118	95	6
③오래	473	96	201	5
④포도	370	63	48	3
合計	1367	287	365	14
	1654		379	
	2033			

次に、TTに現われる自称代名詞を女性話者と男性話者に分けてまとめると、以下の表3と表4のようになる。

表3. TTに現われる女性話者の自称代名詞

女性話者						
自称代名詞 作品	単数形		複数形			
	わたし	あたし	わたし たち(ら)	あたし たち(ら)	うち(の)	わが
①母	33	87	9	5	1	6
②私	261	0	19	0	10	2
③懐	253	0	54	0	15	0
④ぶ	164	0	4	0	12	0

合計	711	87	86	5	38	8
	798		137			
	935					

表4. TTに現われる男性話者の自称代名詞

自称代名詞 作品		男性話者											
		単数形				複数形							
		わたし	ぼく	おれ	わし	わたし たち (ども)	ぼく たち (ら)	おれ たち (ら)	わし たち (ら)	うち (の)	わが	我々 (の)	
①母		0	18	3	25	0	1	2	0	0	0	0	
②私		37	77	39	0	7	8	6	0	6	4	1	
③懐		123	24	108	11	14	3	38	3	1	1	12	
④ぶ		2	11	51	25	0	1	3	2	0	0	0	
合計		162	130	201	61	21	13	49	5	7	5	13	
		554				113							
								667					

TTに現われる単数の自称代名詞には、男女共に使用される「わたし」があり、その他の自称代名詞として、女性話者には「あたし」、男性話者には「ぼく、おれ、わし」が使用されている。女性専用の「あたし」は対訳資料①でのみ現われ、女性話者は聞き手との関係や場のあらたまり度とは関係なく一貫して「わたし」を使用しているようである。男性話者の場合は、「おれ」の出現数が最も高く、「わたし」と「ぼく」はそれに次いでいる。複数形には単数形の後ろに「たち、ども、ら」が付いたものの他に、「うち(の)」「わが」「我々(の)」が現われた。

自称代名詞の出現数を比べてみると、単数形と複数形ともにSTの方が多。これは、鄭惠先(2001)が指摘しているように、TTでは自称代名詞が省略されている場合が多く、日本語の方は韓国語に比べ人称代名詞の使用を避ける傾向があることを示している。また、「나」が再帰代名詞「自分」や親族名称に訳されている場合⁴⁾や、STでは「우리+名詞」の使用が多く見られるが、TTでは省略されている場合⁵⁾が多いため、これらの要因が人称代名詞の出現数にずれを生じさせているようである。

4) ST: 남이사 히죽거리든 광녀같이 춤추든 내 일은 내가 알아서 할 테니까 신경 끄세요. (포 243)

TT: 関係ないでしょ。ニヤニヤしようが、狂ったように踊ろうが、自分のことは自分ですわ。ほっといてよ。(ぶ 162)

5) ST: 제 말씀은 어떻게 우리 지현이한테 물려주시려고 하나 해서요. (포 15)

TT: 私を知りたいのは、なぜ^{지현}に譲るのかということです。(ぶ 14)

4.2 女性話者の自称代名詞の使用

女性話者の自称代名詞には、「わたし」と「あたし」の二つが使用されている。STでは聞き手が誰なのかによって「저」と「나」を使い分けているが、TTでは「わたし」を使用する話者と「あたし」を使用する話者が区別されている。つまり、一人の人物が「わたし」と「あたし」を使い分けるのではなく、はじめから一つの自称代名詞を選択し、聞き手や場面に関係なくその語を使用するのである。

4.2.1 わたし

まず、「わたし」の使用例から見てみよう。

(1) ST: 안녕하세요? 저는 박은결입니다. 엄마한테서 아저씨에 대한 말씀을 들었어요. (오 하124)

TT: こんばんは。私は朴ウンギョルです。母からおじさんのことを聞きました。(懷 下138)

(2) ST: 저기요, 할아버지 그날은 제가 너무 화가 나고 해서 저도 모르게 (포 323)

TT: あの、おじいちゃん。あの日は私、すごく腹が立って……。(ぶ 224)

(3) ST: 아버지, 어제는 제가 잘못했어요. (오 상91)

TT: お父さん、昨日は私が悪かったです。ごめんなさい。(懷 上98)

(1)-(3)は、聞き手が「おじさん、おじいちゃん、お父さん」であることから目上に対する発話だということが分かる。STの「저」に対して、TTでは「わたし」を対応させている。

(4) ST: 내가 농사를 어떻게 짓거나 말거나 택이 무슨 상관이에요? (포 9)

TT: 私が畑をどう耕そうと、あなたには関係ないわ。(ぶ 9)

(5) ST: 그럴 줄 알았어요. 그럼 왜 나한테 말 한했어요? (오 상252)

TT: そうだと思いました。でも、どうして、私に話してくださらなかったの?(懷 上280)

(4)と(5)は、それぞれ(2)と(3)の話者と同一人物であるが、聞き手が同等⁴⁾であるため、STでは「나」を使用している。この場合もTTでは「わたし」に対応させている。従って、金丸(1997)が指摘しているように、女性話者の使用する「わたし」は、ややフォーマルな場面からインフォーマルな場面まで、最も広く一般的に用いられていることが分かる。

ところで、4種の作品の中でTTに「わたくし」が使われている用例が一つだけ見つかった。

4) STでは「해요体」が使われているが、聞き手は目上ではなく、年齢があまり離れていない同等の関係にある人物である。

(6) ST: 저도 한국에서 왔어요. 이곳으로 파견 나와 처음 만난 한국사람이네요.
(엄 278)

TT: わたしも韓国から来ました。こちらへ派遣されてきて、初めてお会いする韓国人
ですね。
(母 325)

話者は初めて会った韓国人に対して「わたし」を使用しており、初対面ということからフォーマルな場面だと認識しているようである。しかし、これはこの場面に限られた使用であり、よりインフォーマルな場面に移れば、おそらく(6)の話者も「わたし」に切り替えるのではないかと思われる。

4.2.2 あたし

次に、「あたし」に関しては、二人の女性話者だけにその使用が見られた。

(7) ST: 나는 니 이모가 죽었을 때 울 수조차 없었단다. (엄 32)

TT: あたしは姉さんが息を引き取ったとき、涙を流すこともできなかったよ。 (母 34)

(8) ST: 안에 있는가? 나, 들어가네. (엄 176)

TT: うちにいるおかい? あたし、部屋へ入るよ。 (母 203)

(7)と(8)の話者は、対訳資料①に登場する「母(オンマ)」とその「義理の姉」である。二人は田舎に住む老年の女性であり、TTでは「あたし」だけを使用している。金丸(1997)によれば、「あたし」は女性専用で、フォーマルな場面では用いられない。二人の話者は家族内の会話にだけ登場するため、STでも「나」のみを使用している。

女性話者の自称代名詞に関しては、次のようにまとめることができる。STでは聞き手が目上であったりフォーマルな場面では「저」が使用されるが、TTにおいては「わたし」がフォーマルな場面だけでなく、インフォーマルな場面でも同時に用いられる。また、インフォーマルな場面での「わたし」と「あたし」の使い分けは見られず、翻訳者は話者の人物設定を行った上で、話者に一つの自称代名詞のみを使わせている傾向があるようだ。

「わたし」と「あたし」の使用についてテレビドラマやトーク番組に登場する若い男女の会話を分析した李徳霞(2003)によると、女性話者が使用した自称代名詞は、全体の71回のうち「わたし」が68回、「あたし」が3回という結果が出ている。「あたし」の使用回数が非常に少ない理由について、分析資料がドラマの会話を中心にしているため、脚本の影響があると述べている。しかし、実際の話し言葉を分析した研究(小林、1997: 120-122)では、50代を除くどの年代でも「あたし」のほうがよく使われており、被験者44人のうち27人が状況に応じて「わたし」と「あたし」を使い分けているという。「あたし」がどちらかといえば雑談で用いられる傾向にあり、フォーマルの度合いによる使い分けが行われ

ているようである。また、「わたし」と「あたし」の使い分けと文体の丁寧度とは必ずしも合致しないという。つまり常体とともに用いられている「わたし」の使用例もかなりの数にのぼり、「わたし」が発話の場としてはややフォーマルに傾きながらも、文体の面からは特にあらたまったものではなく、くだけた発話の中にも用いられているのである。このように実際の話しことばでは、女性話者が「わたし」と「あたし」の使い分けを行っているにも関わらず、対訳資料では一方の自称代名詞だけを用いる傾向があることが分かった。

4.3 男性話者の自称代名詞の使用

男性話者の自称には、「わたし」「ぼく」「おれ」「わし」の4つが使用されている。上述したように、「わたし」は男女ともに最も標準的に用いられる自称代名詞であり、「ぼく」「おれ」「わし」は男性専用となる。STでは目上に対しては「저」を基本的を使用しているが、インフォーマルな場面では目上に対しても「나」を使用する用例が見られる。また、TTでは女性話者とは違って「わたし」と「ぼく」、「ぼく」と「おれ」を使い分けられていることが分かった。

4.3.1 わたし

STの「저」に対応する「わたし」の使用例から見てみる。

(9) ST: 아버지, 저와 결혼할 사람입니다. (오 상128)

TT: お父さん、私の結婚相手です。 (懷 上139)

(10) ST: 제 말씀은 어떻게 우리 지현이한테 물려주시려고 하나 해세요.

(포 15)

TT: 私が知りたいのは、なぜジヒョンに譲るのかということです。 (ぶ 14)

(11) ST: 왔다갔다하시면서도 절 못 본 모양이지요? 저는 줄곧 거기 앉아 있었습시다. (오 하11)

TT: 歩きまわっていたのに、私が見えなかったようですね？私はずっとあそこに座ってました。 (懷 下9)

(12) ST: 한 가지 진짜로 말할 수 있는 게 있다면 그건 저도 두 분과 마찬가지로…… 진짜 꼴통이라는 겁니다. (우 240)

TT: ただひとつ、本当のことが言えるとしたら、それは私もおふたりと同じように…… 偏屈者だってことです。 (私 178)

5) A: だって、エピソードってわたしとていいと思うのよ。

B: わたしもいいと思う。

小林(1997: 122)

STでの「저」の使用例を見ると、実際には目上に((9)、(10))だけでなく、同等の関係であっても親疎関係において親しくない場合(11)や目下に対しても社会的な関係を維持する上で(12)「합쇼체」や「해요체」と共に用いられることがある。しかし、後者の場合、「저」よりも「나」を使用する用例が多く、TTでは「わたし」が対応している。(13)と(14)は「나」に「わたし」が対応し、STとTTにはいずれも敬体が使用されている。

(13) ST: 가을이 되니까, 내가 겁이 나고 내가 잠이 안 와요. (우 271)

TT: 秋になると、私のほうが怖い、眠れないんです。 (私 203)

(14) ST: 나는 그 동네를 좋아해요. 저건 비행기에서 홍보용으로 나오는 잡지에서 오린 거예요. 동불상은 내가 올 때 책집 속에다 넣어 가지구 온거요. (오 하226)

TT: 私はわりに仏教系が好きなんです。それは飛行機の中で広報用の雑誌から切り取ったものです。銅の仏像は私がこちらに来る時、本と一緒に持ってきたんです。 (懐 下252)

次に、同等または目下の聞き手に対して、「わたし」が用いられている用例を見てみる。

(15) ST: 박형, 부탁이 있어. 나는 다시는 여기 나타나지 않을 거야. (오 상203)

TT: 朴さん、お願いがあるんだ。私はもう二度とここには戻らない。 (懐 上227)

(16) ST: 오형6), 잠깐 나하구 얘기 좀 합시다. (오 하131)

TT: 呉君、ちょっと私と話をしようか。 (懐 下146)

(17) ST: 그래 꼭 전화하지. 나두 은걸이를 만나구 싶구나. (오 하125)

TT: もちろん、電話するよ。私もウンギョルさんに会いたいから。 (懐 下139)

(15)は同等に、(17)は目下に対して発話しているため、STとTTでは常体を用いている。しかし、(16)は刑務所の係長が囚人に対して発話する場面であり、STではフォーマルな場面と設定しているせいか「합쇼체」を使用しているが、TTでは目下に対する発話として常体を使用している。(15)から(17)のTTでは、いずれも親疎関係においてはあまり親しくない聞き手に対して「わたし」とともに常体が用いられている。しかし、実際の話し言葉を調査した小林(1997)によると、男性話者の使用する「わたし」は、すべて敬体とともに現れる

6) 「형」は、同年輩やよそよそしい間柄の年下の人に対する尊敬語。姓や名前の下に付けて相手と呼ぶときに使う。(『프라임 한일사전』 제2판)

ため、「わたし」が男性においては強いフォーマルの意識とともに用いられ、女性の用いる「わたし」とはかなり違う面があると指摘している。対訳資料では「わたし」が敬体と常体の両方に共起しているものの、あまりくだけた場面ではなくややフォーマルの意識を伴う発話の中で用いられている。これは、男女共に使用する「わたし」が、その待遇段階の把握については男女に差があり、女性の使う「わたし」のほうが丁寧度が低いという小林(1997)の主張を裏付けるものだと言えよう。

4.3.2 ぼく

「ぼく」は一般的に男性専用であり、「わたし」よりもインフォーマルに使われる自称代名詞である。

(18) ST: 내가 서울 처음 왔을 때 살던 곳이다. (엄 85)

TT: ぼくがソウルへ初めて出てきたとき、住んでいたところだ。 (母 95)

(19) ST: 나부터도 상사한테 싫은 소리 듣고 날마다 죽겠다는 소리 하면서도 막상 농사지으려면 못할 것 같은데 뭐. (포 190)

TT: 僕も上司に嫌みを言われながら毎日死にそうだと思っても、農業をやれと言われたらできないよ。 (ぶ 125)

(20) ST: 나하구 소주 한 병만 대작해주는 조건이라면 밥을 먹겠어. (오 상125)

TT: 僕と焼酎一本だけ一緒に飲んでくれるなら、ご飯を食べようかな。 (懷 上135)

(18)-(20)は、インフォーマルな場面で「ぼく」が用いられ、「나」に対応している用例である。「ぼく」は「わたし」に比べてあらたまり度が低いため、「나」に対応する自称代名詞だと思われがちだが、実際には「저」に対応する用例も多く見られた。

(21) ST: 전한테 이리저 마십시오. (중략)그러면 수녀님께서 전를 살려주시기라도 할 거란 말입니까? (우 60)

TT: 僕にそんなことをおっしゃらないでください。(中略)そうしたら、修道女さんは、僕の命を救ってくださるとも言うのですか? (私 39)

(22) ST: 안녕하십니까, 어머님. 전……. (포 429)

TT: こんにちは、お母さん。僕は……。 (ぶ 323)

(23) ST: 전 사무실로 돌아가야겠어요. 삼촌 이따 저녁에 뵙지요. (오 상27)

TT: 僕、事務所に戻らなきゃならないんです。叔父さん、また夕方、会いましょう。
(懐 上27)

(21)-(23)はいずれも「저」に「ぼく」が対応しており、目上の聞き手に対する発話である。(21)と(22)はややフォーマル、(23)は親族間のインフォーマルな場面で「ぼく」が用いられている。金丸(1997)は、野元(1987)が「子どもの場合は相手がだれでだろうと『僕』を使うことも許されますが、ある程度の年齢になったら、同輩以下に対しても自分を示すときはいいのですが、その他は不適當です」と述べていることを挙げ、これに対して、「学者同士など、限られた世界では、上下関係にかかわらず、またフォーマルであるかどうかにかかわらず広く用いられている」と指摘する。しかし、実際の話し言葉では、金丸(1997)が述べているように学者という職業層だけでなく、一般的に広く「ぼく」が自称代名詞として用いられているようである。小林(1997)の調査結果によると、「ぼく」は雑談に使われている例が比較的多いが、仕事関係にも「おれ」よりはよく使われ、「わたし」との違いは文体をあまり選ばず、敬体にも常体にも用いられるという。従って、「ぼく」は場面・文体・相手との関係・フォーマル度を問わず、比較的広く使われる自称代名詞だということが分かる。また、「ぼく」がくれた「おれ」よりはむしろ「わたし」に近い待遇的位置にあることを示している。

4.3.3 おれ

「おれ」は、相手が同輩以下であるときに使う語であり、フォーマルな場面では使われないとされる自称代名詞である。

(24) ST: 나도 고모 댐에 죽겠다. 마음은 알겠는데 이 양반 특하면 나를 찾아와 재심 좀 어떻게 안 되겠느냐고 하고 (중략) 나도 죽겠어.(우 131)

TT: 俺も叔母さんにはほとんど困っている。叔母さんの気持はわかるけど、しょっちゅう俺のところ、何とか死刑囚の再審ができないかとか (中略) 実は俺も困ってるんだ。
(私 93)

(25) ST: 나도 양복 두 벌로 십 년이나 버티고 있잖아. (포 23)

TT: 俺だってスーツ二着で十年も耐えてるじゃないか。(ぶ 23)

(26) ST: 형수 형수, 나 학교 좀 보내줘. 중학교 좀 보내줘. 그러면 내가 평생 갚을게. (엄 182)

TT: お義姉ちゃん、お義姉ちゃん、お願いだからおれを中学へ行かせてくれよ。中

学へ通わせてくれて。そうしてくれたらおれは一生かけて恩返しをするよ。

(母 210)

(24)と(25)は、インフォーマルな場面での発話であり、聞き手は話者の妹と妻である。ここでは「나」に「おれ」が対応し、STとTTともに常体が使われている。「おれ」について小林(1997)は、「わたし」「ぼく」とは違って、「です」「ます」などのない常体とともに用いられるのが特徴だと述べている。しかし、実際には(26)のように目上に対しても使われたり、(27)と(28)のように「저」に対応し、敬体をともなって現れる場合もある。

(27) ST: 전 처음에 수녀님 만났을 때 욕하고, 난리쳤던 거 생각해 보세요.

(우 91)

TT: 俺も初めて修道女さんにお会いした頃は、怒鳴ったり騒いだりで大変だったってこと覚えてらっしゃるでしょ。

(私 61)

(28) ST: 예, 제가 손을 볼게요. 지금 들어오시는 거예요?

(포 211)

TT: はい、俺が直します。今お帰りですか？

(ぶ 138)

目上に対して敬体を使用しつつも「おれ」を選択した話者は、普段の言葉遣いの中で主に「おれ」を自称代名詞として用いる多少気質の荒い人物として描かれている。これは翻訳家が作品の中で設定した人物の個性によるものと考えてもよいだろう。小林(1997)の研究は、職場という限られた場面での人称詞の使用を調査したものであるため、談話資料の中で発話が見られないから、その人物がその語を使うことはない判断することはできない。しかしながら、「わたし」「ぼく」「おれ」のうちどれを用いるかという選択は、従来の待遇度による使い分けに比べて近年はかなり緩やかになってきているようである。小林(1997)が指摘しているように、自称代名詞が基準にとられない自由な意義で用いられることによって、待遇度に合わせるのではなく、「絶対的な個を表す」ものとして変化していると言えるであろう。

そして、「おれ」と敬体の共起についての研究には、鄭恵先(2003)がある。鄭恵先は1895年から1999年の間に発表された文学資料を3期に分けて通時的な分析を行っている。1895年から1935年の近代小説からは「おれ」と敬体の共起は見られなかったが、1997年から1999年においては若干ではあるが(4.3%)、共起の比率が上がっていることに基づき、「おれ」の使用における文体の制約が時代とともに緩くなりつつあり、「おれ」の使用範囲が徐々に広がっていると述べている。「ぼく」と「おれ」が「저」に対応したり、敬体と共起することは、やはり待遇上の制約が緩くなり、その使用範囲が広がったことを意味し、この傾向は対訳資料の分析からも観察することができた。

4.3.4 わし

金丸(1997)によれば、「わし」は、尊大感を伴って目下の者に対して、主に老人の男性に限って用いられる自称代名詞である⁷⁾。対訳資料からは3つの作品で「わし」が出現し、いずれも老年の男性が使用している。

- (29) ST: 니 내 말 잘 들어라. (포 323)
 TT: おめえ、わしの話をよく聞けや。 (ぶ: 224)

- (30) ST: 나는 그 때, 해방된 우리나라를 자유와 평등이 넘치는 세상으로 만들려고 친구들과 같이 활동을 했다. (중략) 그리고 거기서 젊은 나는 시대하구 같이 죽어버렸어. (오 상146)
 TT: わしはあの時、解放された祖国を自由と平等に満ちた世の中にしようと、友達と一緒に活動した。(中略)そしてそこで、若かったわしは時代とともに死んでしまった。(懐 上159)

(29)と(30)は、老年の男性が目下の聞き手に対して発話する場面である。しかし、親族の目上(弟→姉)に対して、または親疎関係において親しくない初対面の相手に対しても「わし」が用いられる場合もある。

- (31) ST: 여가 있담 내가 진작 연락했지 안 했겠는가? (엄 178)
 TT: ここにおったらわしがとっくに知らせとるわい、知らせぬはずがなかる?(母 205)

- (32) ST: 내가 약사인데 그 상처를 보고선 그냥 둘 수가 없었소. (중략) 낯선 사람인 내가 발을 만지는데도 무기력하게 가만있었소. (엄 123)
 TT: わしとても薬剤師の端くれですからな。(中略)見ず知らずのわしが足をいじくりまわしても、気力がないらしくじっとしておりました。(母 140)

(31)と(32)のSTでは「하오体」が使われており、聞き手に対して尊大な態度を示しているとは思えない。では、翻訳者はなぜ老年男性の自称代名詞に「わし」を使わせているのだろうか。金水(2003)は、「わし」や終助詞「わい」「のう」などを使用する言葉遣いを「老人語」と呼び、役割語⁸⁾の一種として捉えている。「老人語」を使う人物を見ると、

7) 「わし」は主に男性専用となっているが、地域によっては女性が「わし」を用いるケースもある。
 8) 金水(2003)は、ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼んでいる。金水は、人称代名詞を日本語の役割語にとつての重要な指標と捉えている。

単に老いぼれて弱々しい、ぼけているなどの性質を持っているだけでなく、威厳がある、重々しい、知恵があるなどのイメージに結び付けられるという。方言は別として実際にはあまり聞くことの少ない「わし」を用いることによって、話者が老年であること、威厳や、頑固であることなどを表していると言えるだろう。

4.3.5 自称代名詞の使い分けとその要因

ここまで見てきたように、対訳資料に出現する男性話者の自称代名詞は「わたし」「ぼく」「おれ」「わし」の4つがある。資料を詳しく見てみると、女性話者とは違って男性話者は固定した1語を自称代名詞として用いるのではなく、聞き手によって使い分けたり、もしくは同一人物に対しても関係や場面の变化によって使い分けていることが分かった。以下では、自称代名詞の使い分けにはどのような要因が影響しているかについて考察する。

4.3.5.1 聞き手との上下関係

まず、対訳資料③に登場する「ヒヨヌ」の用例を見てみる。

(33) ST: 어머니, 저 현읍니다. (중략) 제게 시간을 좀 주셔요. 차차 정리하겠습니다. (오 상275)

TT: お母さん、私、ヒヨヌです。(中略) 私に少し時間をください。少しずつ整理しますから。 (懷 上304)

(34) ST: 어떻게 된 거야. 나는 니가 담치기 해가지구 골목에서 달려간 줄 알았다. (오 상166)

TT: どうやって逃げたんだ。俺はお前が塀を乗り越えて路地を走っていったと思った。 (懷 上182)

(35) ST: 나야 나. 현관문 좀 열어라. (오 상272)

TT: 俺だ、俺。玄関をちょっと開けてくれ。 (懷 上301)

「ヒヨヌ」は聞き手の年齢を基準にした上下関係に応じて自称代名詞を使い分けている。目上には「わたし」を、同等または目下には「おれ」を用いている。また、対訳資料②に登場する「ユンス」も上下関係をもとに目上には「ぼく」を、目下には「おれ」を使用している。

(36) ST: 저한테 이리저 마십시오. (중략) 그러면 수녀님께서 저를 살려주시더라도 할 거란 말입니까? (우 60)

TT: 僕にそんなことをおっしゃらないでください。(中略)そうしたら、修道女さんは、僕の命を救ってくださるとも言うのですか? (私 39) ((21)の再引用)

(37) ST: 유정이 누님도 나 믿고 딱 한 번만 예수님 믿어 봐요. 내가 보증할
게요. (우 298)

TT: ユジョンさんも僕のこと信じて、一度でいいからキリストを信じてみたらどうです。
僕が請合いますから。 (私 226)

(38) ST: 너 내 말 잘 들어. 너 지금 집에 가지 않으면 형아도 도망간다. (우 27)

TT: おまえ、俺の言うことよく聞け。家に帰らなかったら俺もどっかに行ってしまうぞ。
(私 13)

4.3.5.2 聞き手との親疎関係

「ヒョヌ」と「ユンス」が行っている使い分けは、これまで見てきたように聞き手との上下関係によって「わたし」「ぼく」「おれ」のどれかを選択しているが、一方対訳資料④に登場する「テッキ」の場合はそうでない。

(39) ST: 좀 잘 할 수 없습니까? 잘하면 나도 잔소리할 일 없고 서로 좋잖아요.
(포 119)

TT: 少しはまともに仕事をしろ。そうすれば俺も小言を言わなくてすむ。9) (ぶ 83)

年下の相手に対して「おれ」を使用するのはおかしくないが、かなりの年輩者である「キムじいさん(영감님)」に対しても「おれ」を用いている。

(40) ST: 제가 손볼게요. 주무세요, 영감님. (포 211)

TT: 俺が見ますよ、もうお休みになってください。 (ぶ 138)

4.3.3で上述したように、敬体とともに「저」に対応する「おれ」を使用する例は他にも見ることができたが、「テッキ」の場合は、聞き手との上下関係ではなく、親疎関係で自称代名詞を選択しているようである。

(41) ST: 안녕하십니까, 어머님. 전……. (포 429)

TT: こんにちは、お母さん。僕は……。 (ぶ 323) ((22)の再引用)

(41)は恋人の母親にはじめて挨拶をする場面である。一つ屋根の下で暮す「キムじいさん」とは親しい間柄であるため、敬体を使いながらも「おれ」を選択していることが分かった。しかし、初対面である恋人の母親には、「おれ」ではなくややフォーマルな「ぼく」に切り替えていることから、聞き手との親疎関係および場面のあらたまり度が自称代名詞の選

9) 年下の「ジョン」に対して、STではストーリー全般にかけて「해요체」を使用しているが、TTでは「テッキ」のぶっきらぼうな性格を表すためか、常体を使い続けている。

択に影響を与えているようである。

また、逆に目下に対してよりフォーマルな切り替えをしている場合もある。対訳資料③に登場する「ユンヒの父親」は、4.3.4の(30)に見られるように自分の娘に対しては「わし」を用いているが、同じく目下であっても二度目に偶然出会った女子学生に対しては「わたし」を使用している。

(42) ST: 오랜만이오. 나 알아보겠소? 지난번에 땡감 먹인 걸 사과하오. 난 정
말 몰랐어요. (오 상155)

TT: 久しぶりですね。私を覚えていますか?この前は渋柿を食べさせてすまなかった
ね。私は本当に知らなかったんですよ。 (懐 上170)

4.3.5.3 聞き手の性別

対訳資料③に登場する「ヒョヌ」の場合は、親しい同等の関係であっても、聞き手の性別によって「ぼく」と「おれ」を使い分けている。

(43) ST: 김밥 싸가지구 등산 가자. 김밥은 내가 말 거야. (오 상211)

TT: のり巻きを作って山に行こう。僕が作るから。 (懐 上235)

(44) ST: 어떻게 된 거야. 나는 니가 담치기 해가지구 골목에서 달려간 줄 알
았다. (오 상166)

TT: どうやって逃げたんだ。俺はお前が塀を乗り越えて路地を走っていったと思った。
(懐 上182) ((34)の再引用)

(43)は恋人に対して、(44)は同僚の男性に対しての発話である。女性に対しては「ぼく」を、男性に対しては「おれ」を用いている。対訳資料の中で聞き手の性別によって自称代名詞を使い分ける人物は「ヒョヌ」だけであるが、おそらく「ぼく」と「おれ」のフォーマル度の違いを考慮し、その語を使用する場面での発話の質や聞き手への待遇度に合わせて使い分けをしていると思われる。「ぼく」と「おれ」の使い分けについては、以下の4.3.5.6でもう少し詳しく述べる。

4.3.5.4 親疎関係の変化

次に、聞き手が同一人物であっても、自称代名詞が使い分けられている用例について見ていく。対訳資料③に登場する男性話者「ヒョヌ」「ヨンテ」「李教授」は、女性話者「ユンヒ」と知り合っていないころには、三人とも「わたし」を用いている。

<ヒョヌ>

- (45) ST: 한선생, 저는 사회주의잡니다. (오 상84)
TT: 韓さん、私は社会主義者です。 (懷 上90)

- (46) ST: 또 있습니다. 이걸 내가 지은 시고, 다음 게 더 좋아요. (오 상107)
TT: があります。今のは私ので、次のはもっといいですよ。 (懷 上115)

<ヨンテ>

- (47) ST: 왔다갔다하시면서도 절 못 본 모양이지요? 저는 줄곧 저기 앉아 있었습니
다. (오 하11)
TT: 歩きまわっていたのに、私が見えなかったようですね? 私はずっとあそこに座って
ました。 (懷 下9) ((11)の再引用)

<李教授>

- (48) ST: 나한테 빚졌죠? 나두 그런 적이 있어서 잘 압니다. (오 하222)
TT: 私に借りを作りましたね? 私も経験したので、よくわかります。 (懷 下247)

(45)-(48)では、「나」と「저」に対応する「わたし」を選択し、敬体を使用している。いずれも「ユンヒ」との親疎関係がまだ遠かった頃の発話である。ところが、ストーリーが展開するにつれて互いの関係が親しくなり、STとTTともに常体を使用する発話になると、自称代名詞は「ぼく」または「おれ」に代替される。

<ヒョヌ>

- (49) ST: 나두 봤어. 읍내 중국집에 짜장면 먹으러 갔다가. (오 상252)
TT: 僕も見た。町の中華料理屋にジャージャー麺を食べにいった。 (懷 上280)

<ヨンテ>

- (50) ST: 이걸 다 한형 거라구. 내가 빌려 쓸 참이야. (오 하52)
TT: これは、みんな韓さんのものなんだ。俺が借りて使うつもりなんだ。 (懷 上59)

<李教授>

- (51) ST: 어서 올라가 자요. 난 여기서 눈 좀 붙이고 있다가 날 밝으면 돌아 갈게. (오 하249)
TT: 早く上にあがって寝なさいよ。僕はここでちょっと休んで、夜が明けたら帰るから。 (懷 下277)

(49)-(51)を見ると、「ヒョヌ」と「李教授」は「ぼく」を、「ヨンテ」は「おれ」を用いている。敬体から常体へ、「わたし」から「ぼく」または「おれ」に代ったのは、聞き手との親疎関係が変化したことを意味する。従来意識されてきたように「わたし」「ぼく」「おれ」のフォーマル度には差があるため、初対面のような疎い関係から親しい関係に変化することによって、自称代名詞が「わたし」から「ぼく」や「おれ」に切り替わるのは自然である。しかし一方で、恋人関係に発展したことによって「ぼく」から「おれ」に切り替える場合もある。対訳資料③に登場する「美大の先輩」は「ユンヒ」の初恋の相手で、はじめは「ぼく」を用いているが、交際が始まってからは「おれ」を使用している。

(52) ST: 먼저 가보슈. 난 요 근처에 들플 데가 있어서. (오 상126)

TT: 先に帰って。僕はこの近所で寄るところがあるから。(懐 上137)

(53) ST: 고마웠어. 나한테 잘해줘서. (오 상137)

TT: ありがとう。俺によくしてくれて。(懐 上149)

「ぼく」と「おれ」はともに「わたし」に比べるとフォーマル度が低く、同等や目下の聞き手に対して使用できる自称代名詞である。しかし、親疎関係の変化によって「ぼく」から「おれ」への切り替えが起ったということは、「ぼく」と「おれ」の間にはフォーマル度の違いだけでなく、聞き手に対する心理的距離が絡んでいるのかも知れない。上述したように、「ヒョヌ」の用例からは女性に対しては「ぼく」を、男性に対しては「おれ」を使用し、二つを使い分けていることが分かった。このことから、同等の関係であっても、多少は礼儀をわきまえないければならない相手なのか、少しばかりなら粗野な態度を表しても許してもらえるくらいの相手なのか、聞き手に対する話者の心理的距離や甘えが、「ぼく」と「おれ」の選択に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

4.3.5.5 発話場面の变化

同一人物に対する自称代名詞の切り替えは、発話場面の变化によっても起ることがある。対訳資料③に登場する「朴さん」は、工場の工員であるが、新入りの「ヒョヌ」に対してははじめは「わたし」を使用している。

(54) ST: 내가 이래빼두 기능공인데 한달 살구 나면 맨날 적자야. (오 상179)

TT: 私、こう見えても技能工なんだけど、月末にはいつも赤字ですよ。(懐 上198)

ところが、「ヒョヌ」を囲む歓迎会の席で酔いが回ると、「わたし」から「おれ」に切り替えを行っている。

(55) ST: 나 아무래두 임사장하군 같이 일 못하겠어. 이거 봐, 오형은 우리를 잘 몰라. (중략) 나하구 거의 같은 시기에 입사했었어. (중략) 나 아무래두 안되겠어. 직장 옮길 거야. (오 상182)

TT: 俺はとにかく、林社長と一緒に仕事続けられねえ。おい、呉さんはまだ俺たちのことよく知らねえんだよ。(中略) 俺と同じ頃に入ったんだ。(中略) 俺はとにかく続けられねえ。職場を変わってやらあ。(懐 上201)

(54)と(55)のSTでは、「나」とともに「해体」が使われているため、待遇度では同じレベルになっているが、TTでは場面の變化に伴い敬体から常体へ、「わたし」から「おれ」に切り替えている。TTでのこのような切り替えは、酒を飲む席というインフォーマルな場面に移り、酔って気が大きくなった話者の様子をよく表していると言えよう。しかし、酔いが覚めて素面に戻った場面では、再び「わたし」を用いている。

(56) ST: 거기 편히 앉으슈. 자아, 우린 이렇게 산다우. (오 상184)

TT: 楽にしてください。さあ、私たち、こんなふうに暮してるんですよ。(懐 上204)

このように、STでは變化が見られないにもかかわらず、TTでは発話場面の變化に応じて自称代名詞や敬体と常体が切り替わることもあり、これはテキストに対する翻訳家の理解とも深く関わりがあると言えるだろう。

4.3.5.6 「ぼく」と「おれ」の使い分け

ここまでの分析を通じて、男性話者にはインフォーマルな場面で「ぼく」を使用する人物と、「おれ」を使用する人物がいること、そして、聞き手の性別によって、または聞き手が同一人物であっても場面の變化によって「ぼく」と「おれ」を使い分ける人物がいることが分かった。では、「ぼく」と「おれ」の使い分けはどのようにして行われているのだろうか。以下では、従来意識されてきた聞き手との上下関係やフォーマル度の違いではなく、「ぼく」と「おれ」によって表現されるキャラクターの性質をもとに論じたいと思う。

金水(2003)によると、「わたし」「わたくし」は性別を問わず、書きことばにも公的な話しことばにも用いられる中立的な代名詞であるのに対し、「ぼく」「おれ」はもっぱら私的な話しことばに用いられ、話し手のキャラクターをはっきりと反映しているという。「ぼく」の話者と「おれ」の話者のキャラクターの違いは、戦前の小説などにすでに現れており、例えば思慮深い少年は主に「ぼく」を使用し、乱暴者は「おれ」を使用していた。上昇志向に溢れた理想主義的なヒーローは、圧倒的に「ぼく」使用者が多かったのである。ところが、1960年-1970年代になると、むき出しの闘志や野性味を持ったキャラクターがヒーローとなり「おれ」を使用するようになった。ヒーローが「おれ」を用いるようになることと並行して、

「ぼく」のイメージは、家庭や学校に擁護された柔弱なキャラクターに結び付けられるようになったのである¹⁰⁾。

そして、中村(2007)は、「ぼく」と「おれ」という二つの自称代名詞によって、男性像の中に「おとなしい好青年」と「闘志むき出しの熱血漢」という区別が作り出されたことを踏まえ、「おれ」が密着した男の親しさを表象していると述べている。しかし、1980年代に入ると、上下関係にもとづいた密着した親しさはかっこ悪く重すぎるイメージとなってしまった。なぜならば、日本人の生活が上下関係よりも親疎関係に重点を移行させるに従い、言語資源¹¹⁾の役割も話し手、聞き手、話している対象の距離を表現する働きがより重視されるように変化したからである。密着した関係に替わって、適度な距離感を保った仲間意識が強調されるようになり、「おれ」から「ぼく」に再び移っていった。これは翻訳にも反映されていると、中村(2007)は述べている。

金水(2003)と中村(2007)によって二つに区別された男性像を、対訳資料に登場する男性話者たちに適用してみよう。同等や目下に対しては一貫して「おれ」を使用する③の「ヨンテ」は成金の坊っちゃんでありながらも民主化運動への闘志をむき出しにするキャラクターを表し、④の「テッキ」は、田舎者で気質が荒く武骨な態度をとる青年として表現されている。一方で、「ぼく」を使用する③の「李教授」と④の「先輩(プロデューサー)」は、ホワイトカラーの職種に従事し、穏和で知的な男性として描写されている。

そして、聞き手の性別によって「ぼく」と「おれ」を使い分ける③の「ヒョヌ」は、男性に対しては「おれ」を用いて密着した仲間意識を表し、女性に対しては「ぼく」を用いることで、親しい間柄であっても適度な距離を保ちながら、礼儀をわきまえた態度を示していると解釈することができるであろう。

5. 終わりに

本稿では、韓国語小説を日本語に翻訳したテキストを分析し、韓国語の自称代名詞「저」と「나」に対応する日本語の自称代名詞が、対訳テキストの中でどのように使用されているのかについて考察を行った。

韓国語の自称代名詞は話者と聞き手の上下関係を中心にその使用が区別され、日本語の自称代名詞は話者の性別と聞き手に対する待遇度によって使用が制限される。そのた

10) 金水(2003)は、「おれ」を用いるヒーローとして漫画『巨人の星』の星飛雄馬と『あしたのジョー』の矢吹丈を、「ぼく」を用いるキャラクターには『ドラえもん』ののび太を代表に取りあげている。

11) 言語資源とは、アイデンティティを表現する材料とみなされた言葉のことである。つまり、女ことばや男ことば、標準語や方言など、特定のアイデンティティと結びついていることが広く社会で認められている言葉遣いを指す(中村, 2013 : 69-70)。

め本稿では、女性話者と男性話者に分けて分析し、そこから得た結果を、次のようにまとめることができる。

1)女性話者の場合、「わたし」が「저」と「나」に対応し、「あたし」は「저」に比べてより丁寧度の低い「나」に対応する。これは、女性話者が使用する「わたし」がフォーマルとインフォーマルの両方の場面で広く一般的に用いられるということを示している。

2)男性話者の場合、女性話者と同じく「저」と「나」に対応するのは「わたし」であるが、男性話者の「わたし」は、よりインフォーマルな場面で使われるということから、小林(1997)の指摘どおり「わたし」に対する待遇段階の把握については男女に差があることが分かった。また、「ぼく」は「わたし」に比べてインフォーマルな場面で用いられる男性専用の自称代名詞であるが、実際の使用においては「저」との対応が可能であり、従来認識されてきたよりも広い範囲で使われていることを確認することができた。そして、「おれ」は「わたし」と「ぼく」に比べてよりインフォーマルな場面で用いられると認識されているが、「저」にも対応し、敬体と共起することもある。このような結果は、「ぼく」と「おれ」が示す待遇度が絶対的なものではなく、時代によって変化しているという鄭恵先(2003)の主張を裏付けるものである。

3)男性話者は聞き手との上下関係、親疎関係、聞き手の性別、親疎関係と場面の変化によって、「ぼく」と「おれ」を使い分けている。さらに、「ぼく」と「おれ」は、聞き手に対する待遇の違いだけでなく、どれを選択するかによって話者の性格や聞き手との心的距離を表すこともできる。

4)待遇度による「わたし」「ぼく」「おれ」の使い分けは、時代とともに緩くなってきているため、「저」に対応する自称代名詞は「わたし」に限らず、「ぼく」と「おれ」を使用する用例もある。また、「나」に対応する自称代名詞も聞き手との関係、発話場面、話者のキャラクターによって多様に使い分けられることが、考察の結果明らかになった。

韓日両言語においては、常に聞き手によって話し手の立場が変わってくる。絶対的な「自分」というものは、少なくとも対話の中では姿を現さず、相手との関係、すなわち身分の上下、年齢差、親疎の別によって自分の立場を規定し、それによって自称代名詞を使い分けなければならない(浅野、1991)。対称代名詞の使い分けも同様であり、さらに制限が多くなるため、特に日本語教育では疎かにできない重要な指導項目である。今後の課題として、対称代名詞の使い分けに関する韓日比較研究を行うことで、日本語教育への示唆を提供していきたい。

【参考文献】

- 가혜경(1998) 「한·일 양국어 1,2인칭 대명사의 용법 비교」 『일본어문학』 6 한국일본어문학회 pp.111-133
- 남기심·고영근(1993) 『표준 국어문법론』 탐출판사 pp.77-78
- 許貞淑(2007) 「韓·日 人称 代名詞의 젠더- 考察 -小説의 用例를 中心으로-」 경기대학교 교육대학원 석사논문
- 浅野百合子(1991) 『教師用日本語教育ハンドブック 5 語彙』 国際交流基金日本語国際センター pp.57-58
- 林炫情他(2002) 「日本語と韓国語における呼称選択の適切性」 『日本語科学』 11 国立国語研究所 pp.31-54
- 金丸芙美(1997) 「人称代名詞·呼称」 『女性語の世界』 明治書院 pp.15-32
- 金水敏(2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店 pp.2-28, 122-128, 205-207
- 小林美恵子(1997) 「自称·対称は中性化するか？」 『女性のことば·職場編』 ひつじ書房 pp.113-137
- 鈴木孝夫(1973) 『ことばと文化』 岩波新書 pp.129-206
- 鄭惠先(2001) 「日本語と韓国語の人称詞に関する対照研究」 『人間文化学研究集録』 10 大阪府立大学大学院人間文化学研究科 pp.33-45
- _____ (2003) 「日本語人称詞の社会言語学的研究」 大阪府立大学大学院 博士論文
- 中村桃子(2007) 『〈性〉と日本語-ことばがさぐる女と男-』 日本放送出版協会 pp.59-82
- _____ (2013) 『翻訳がさぐる日本語-ヒロインは「女ことば」を話し続ける-』 白澤社 pp.69-70
- 日本語記述文法研究会(編)(2009) 「第12部 談話」 『現代日本語文法』 7 くろしお出版 pp.37-41
- 野元菊雄 (1987) 『敬語を使いこなす』 講談社 pp.105-106
- 李德霞(2003) 「若い世代の話し言葉における日本語の性差について-終助詞と人称代名詞を中心に-」 『社会環境研究』 8 金沢大学 pp.137-145
- 두산동아 사서편집국(2006) 『프라이ム 한일사전』 제2판 두산동아
- 松村 明(編)(2006) 『大辞林』 第三版 三省堂

要 旨

This thesis analyzes texts of Japanese translation from a Korean novel in order to study how Japanese first-person pronouns are used in Korean-Japanese translation

First, when the speaker is female, "watashi" corresponds to "jeo" and "na" and "atashi" corresponds to "na" which is relatively less polite than "jeo". This shows that "watashi" which is used by female speakers is used both in formal and informal circumstances in general.

Second, when the speaker is male, "watashi" corresponds to "jeo" and "na" as is used by female speakers but there is a gender difference in the identification of level of treatment in a sense that "watashi" is used in more formal circumstances when spoken by male speakers. "boku" is a first-person pronoun that is used only by men in more informal circumstances than "watashi" but in reality, it can correspond to "jeo" and is used more widely than its traditional perception. "Ore" has been perceived to be used in much more informal circumstances when compared with "watashi" and "boku" but the analysis shows that it can correspond to "jeo" and is used even in polite expressions in Japanese in some cases. Also according to the analysis, the male speaker distinguishes "boku" and "ore", depending on the top-bottom relationship and close/distant relationship with the listener, the gender of the listener, the change of close/distant relationship, and the change of speaking scenes.

Lastly, the result of analysis demonstrates that the distinction among "watashi", "boku", and "ore" is becoming blurred in line with changing times and therefore, a Japanese first-person pronoun that corresponds to "jeo" is not limited to "watashi" and a Japanese first-person pronoun that corresponds to "na" is used in diverse ways according to speaker's relationship with the listener, speaking scenes, and speaker's characters.

キーワード : Korean-Japanese translation, first-person pronoun, gender of the speaker, proper use of "watashi" "boku" "ore", relationship with the listener, speaking scene, speaker's character

투 고 일 : 2015. 5. 31
심 사 일 : 2015. 6. 13
계재확정일 : 2015. 7. 4